〈序に代えて〉

日本語の地図――類語辞典の性格――

もしも言葉がなかったら

世の中にもしも言葉というものがなかったら、およそ人間らしい暮らしは成り立たない。万葉集や源氏物語はもちろん、松尾芭蕉の俳句も、夏目漱石の小説も、北原白秋の詩も、小津安二郎の映画も存在しない。シェークスピアの戯曲やカントの哲学も同様だ。ミケランジェロの彫刻やモーツァルトの音楽やユトリロの絵画はありえても、誰もそれについて人と熱く語り合うことはできない。

高尚な芸術面に限らない。いとしい相手に思いを伝えるにも、人恋しい夕べに手紙を認めるにも言葉が必要だし、出前を頼むにも毎日の献立を考えるにも日本人は日本語を使う。病院で体の不調を訴えるにも、それを聞いて医者が適切な指示をするにも、表情や身ぶり手ぶりだけでは何とも心もとない。言葉は人生に潤いを与え、時には命をも救う。

だが、言葉もむろん万能ではない。落日の日本海の色、林を渡る風の音、ワインの味や香り、あるいは憤り、ためらい、晴れがましさといった、感覚や感情の方面を描くのはいささか苦手で、表現にさまざまなくふうが必要だ。が、それでも日本人はつねに日本語で考え、日本語を操って何とか伝えようとしてきた。

そんなふうに日本語は日本人の思考活動を自在にし、日本人らしい生活を支えつつ、知らず知らずのうちにこの国の伝統と文化を築いてきた。時代とともに変遷し今に残る日本語は、現代日本を旅する人びとがそこに生きる言葉の宇宙となっている。

読解のための索引から、表現のための地図へ

その日本人の使用語彙という集合体を、その構成要素である語を単位にして五十音順に並べ、それぞれの語の意味を総合的に記述したのが、いわゆる国語辞典類である。規則的で客観的な配列となっているから、あれこれ迷うことなく誰にでも引きやすい。本を読んだり講演を聴いたりして自分の知らない言葉、うろ覚えの単語に出合った折、その音の記憶を頼りにページをめくる。あやふやな漢字表記を確認し、あるいはその言葉の意味を、一語一語について総合的に調べる目的で使われる。つまり、読解や聴解という受容活動に役立つ辞典である。

一方、口頭発表をしたり文章を書いたり、自分で表現しようとして最適の語を探す段になると、なかなか思うようには運ばない。それぞれの単語が、例えば「気温」「基音」「擬音」「祇園」「机下」「気化」というふうに、意味を無視して機械的に五十音順に並べてある通常の国語辞典では、いくら眺めていても自分の得たい情報にいつまでもたどり着かない。

地名を例にとれば、五十音順の辞典の場合、地理的な位置や距離に関係なく「愛知」「青森」、「長崎」「長野」、「宮城」「宮崎」、「山形」「山口」「山梨」などが偶然隣り合い、「大阪」「京都」「神戸」「姫路」といった近くの都市がそれぞれ遠く隔たってしまう。その性格上当然のことだが、これでは地理的な関係や国土の全体像がまったくとらえられない。

湯気や湯治に何の縁もゆかりもない「音節」と「音素」に挟まれた国語辞典の「温泉」には「出で湯」の情緒など微塵も感じられない。が、地図上の温泉は、近くの町や山や湖や森との位置関係から、そこに至る鉄路などの交通手段まで、互いに関連し合う現実を映して記載されている。話したり書いたりする日本人の表現行動に役立つことをめざすこの『新明解類語辞典』は、いわば《日本語の地図》として、できるだけそういう生きた現実の雰囲気の中で言葉にたどりつくように配慮した道案内だ。その結果、ここでの「温泉」は、その「出で湯」どころか「名湯」「秘湯」や「霊泉」「鉱泉」「冷泉」「ラジウム泉」などに囲まれて、のどかに湯けむりを上げている。

陥没湖 地盤の陥没でできた湖。琵琶湖など。

人造湖 発電・水道用貯水・治水などのためにダムを築き、川をせき止めて人工的に造った湖。

潟 海から切り離されてできた浅い湖沼。「八郎―」

▼→湖畔 1122

b 沼

沼 比較的浅くて泥深い水たまり。湖より小さく池より大きい。「底なしの―」

泥沼 泥深い沼。「―に―入り込む/足をとられる」

沼地 泥水・水たまりなどが続く土地。沼沢。「じめじめとした―」「―に足を踏み入れる」

c 沢

沼沢 文 沼と沢の総称。「―地」

沢 水が浅くたまり、草が生い茂っている低地。「―に咲く花」「―を渡る」

d 池

池 ①人工的に地面を掘ったり土手を築いたりして、その内側に水をためた所。「―に鯉を放す」②自然の窪地に水がたまった所で、沼よりも小さいもの。

古池 古くからある池。「閑寂な―」「ひっそりとした寂しい所という語感がある。」

溜め池 灌漑などの用水をためておく人工の池。

貯水池 上水道や水力発電などに利用する大規模な溜め池。

人工池 人の手によって造られた池の総称。

遊水池 洪水時に、増量した川の水を一時的に貯水して水量を調節する池。

用水池 農業用水・防火用水などをためておく池。

水瓶 都市などに水を供給する貯水池。「東京都の―」

e 堀

堀 ①掘り割り。「―を埋める」②城の周囲などを掘って水をたたえた防御施設。「内/外―」 異字 (②)濠

掘り割り 地面を細長く掘って水を通したもの。「―に沿って歩く」 異形 堀割

釣り堀 池などに魚を飼い、料金を取って釣らせる所。《夏》

生簀 捕まえた魚を生きたまま泳がせておく所。「―に放つ」「―のある料理店」〔水中に作る場合と水槽の場合とがある。〕

f 泉

泉 ①地中から湧き出る水。《夏》「清らかな―」「―が湧く」②地中から水が湧き出ている場所。「―のほとり」

噴泉 文 ①地上に噴出する地下水・鉱泉。②噴水。「―塔」

間欠泉 一定の時間をおいて周期的に熱湯や水蒸気を噴出する温泉。 異字 間歇泉

清水 地面や岩の間などから湧き出る、澄んだ冷たい水。《夏》「―を手で掬う」「苔―」《夏》

岩清水 岩の間から湧き出る澄んだ水。《夏》 異字 石清水

湧き水 地中から自然に湧き出てくる水。湧水。

泉水 文 ①庭に造られた池。「庭園の―」②泉。

噴水 ①水を噴き出させる人工的な装置。吹き上げ。《夏》「―のある―公園/広場」②水が噴き出すこと。「―井戸」

オアシス 砂漠で、水が湧き樹木が生えている土地。〔oasis〕

井戸 地面を深く掘って地下水を汲み取るようにした所。「―を掘る」「―が涸れる」「―水」「古/空―」

井 文 井戸。「山の―」

掘り抜き井戸 地下深く掘って、地下水を湧き出させた井戸。 略形 掘り抜き

井桁 井戸の地上部分に「井」の形に組んだ、木の囲い。「―に組む」

井戸端 井戸の周り。「―に集まっておしゃべりする」

油井 石油を汲み上げて採るために掘った井戸。

温泉 ①地熱によって地下水が熱せられて湧き出るもの。水温が二五度以上か指定の物質を含むものを指す。「―を引く」↔冷泉 ②①を利用する浴場(のある地域)。「―に入る/つかる」「―宿」

出で湯 文 古 温泉。「―の宿」「―巡り」

名湯 けがや病気の回復などに優れた効能のある温泉。山中などにあり、あまり人に知られていない温泉。「陸奥の―」

秘湯 文 霊験のある泉。特に、病気に効き目のある温泉。

霊泉 おいしい水の湧く泉。

醴泉 ①文 冷たい泉。②二五度未満の水温をもつ鉱泉。↔温泉

冷泉 鉱物質やガスを多量に含む泉。温泉と冷泉とに分けられ、狭義には冷泉を指す。

鉱泉 ラジウムの含有量が多い鉱泉。リューマチ治療などに用いられる。

ラジウム泉

▼→薬湯 1022

湯元 地中から温泉がわき出るおもと。また、温泉がわき出る土地。「―の入口」「箱根―」

商号 商店や会社の営業に用いる名称。

尊名 ①尊い称号。②他人の姓名の敬称。お名前。「ご一はかねてより聞き及んでおります」 図他人の姓名の敬称。「一録」

芳名 図盛んな名声。「一を馳せる」

盛名 他人の名の敬称。「ご一はかねがね承っております」

高名 図他人の姓名・名声の敬称。

雷名 尊敬した気持ちを表す呼び方。釈迦牟尼に対する「釈尊」や、釈迦如来、書簡で相手の名前に添える「兄」「大兄」「大人」など。

尊称

敬称 ①敬意を表すために、人の名の下につけて用いる語。②相手(の側の人)に敬意を表す言い方。「尊父」「ご厚意」など。↕謙称

謙称 自分(の側の人の)ことをへりくだっていう言い方。「愚息」「拙宅」など。↕敬称

美称 褒めていう言い方。日本国を指す「瑞穂の国」など。

卑称 他人または自分およびその動作・状態を卑しめた表現。「てめえ」「うぬ」など。「一で呼ぶ」↕尊称

宛て名 手紙や書類などに書く、受け取り人の名。「郵便物の一」

名宛て 宛て名。

さん付け 他人の名前に「さん」という敬称をつけて呼ぶこと。

君付け 他人の名前に「君」をつけて呼ぶこと。〔対等以下の者に対して使う。〕

呼び捨て 名前を呼ぶ時、敬称を添えずに呼ぶこと。呼びつけ。

俗名 ①世間での通り名。通称。②僧の出家前の名。俗姓。↕法名 ③個人の在世中の名。↕戒名・法名

法名 ①出家・入道する時に、俗名を改めて授かる名。②死者に授ける名。↕(①②)俗名

法号 仏教で、戒名。

戒名 ①仏門に入った人に与える名。②僧が死んだ人に付ける名。↕(①②)俗名

諱 固死後に贈る称号。〔もと、生前は口にすることを避けた実名(忌み名)の意。〕

贈り名 身分のある人に、死後贈られる名前。異字 諡

追号 贈り名。

諡号 図贈り名。

地名 土地の名称。「一の由来」

国名 ①国家の名称。②旧国名。「出雲」「常陸」など。

町名 行政区画でいう町の名称。「一変更」〔市と村との間の大きさの「町」と、市や区を構成する小区分としての「町」とがある。〕

校名 学校の名称。「一が知れわたる」

社名 ①会社の名。②結社の名。③神社の名。

職名 ①職業の名称。②職務の名称。「一で呼ぶ」

品名 品物の名。「一と数量を明記する」

件名 ①分類した項目の名。②電子メールなどのタイトル。

商品名 ①商品の名。②商標名。

作品名 文芸作品・芸術作品の題名。『坊っちゃん』など。

書名 書物の題名。「一に凝る」

書目 図書名。「参考一」

誌名 雑誌の名。

紙名 新聞の名。

病名 病気の名。「一を伏せる」

罪名 犯罪の名称。殺人罪・偽証罪など。

表題 表紙に記した書物の題目。演説・作品・演劇などにもいう。「著書の一」「一をつける」異字 標題

題目 表題。「一が決まる」

題名 書物や作品の題目の名前。「一を付ける」

題する 書名。表題。見出し。「文章の一」

タイトル 題をつける。「題して『水戸黄門漫遊記』」

題 表題。書名。「映画の一」「一を付ける」〔title〕

主題 中心となる表題。↕副題

メインタイトル ①書物などの主たる表題。↕サブタイトル ②映画・テレビで、題名を書いた字幕。トップタイトル。〔main title〕

副題 主題の補足説明として付けた題。「論文の一」↕主題

傍題 サブタイトル。副題。

サブタイトル ①副題。②場所などを説明する映画の字幕。〔subtitle〕↕メインタイトル

題辞 書物の巻頭や絵画中に書き記した言葉。題言。

題詞 題辞。

エピグラフ 巻頭や章のはじまりに記された引用文などの題辞。〔epigraph〕

仮題 まだ正式に決まっていない仮の題。「一を示す」

演題 演説や講演の題目。「本日の一」

▽→クレジット 750